

花火

小林まもる

口をあけたまま
人が飲み込むものは
闇の深さだ
花火が自らの華を
裂き続けるのは
いのちの闇の
時間に向かつてだ

破裂する華の轟きに
その都度堪えようもなく
崩れ逝く生身の意識
おのれの花火よ

そのとき人は
立ったまま
下痢をもらしながら
おのれのいのち
その歴史に立つ

明滅する意識の荷電
重く垂れ流した
その下痢を
色つきの夢のように
見届けねばならない